

「賛美は幼子の口に」(要旨)
聖書箇所：マタイ11:20-30

【1】 子どもを招く主イエス

主イエスにはいつも大勢の群衆がついて来ました。マタイ 19 章には印象的な場面が描かれています。そこには律法の専門家もいて、彼らはイエスと結婚や離婚に関する議論を熱心に交わしています。イエスの弟子たちも耳を傾けて一生懸命考えていました。その時です、ふと日常に引き戻されるような出来事が起こりました。一人、二人、三人と、親に連れられた幼児から小学生くらいの年齢の子どもたちが近づいてきたのです。イエスに祝福の祈りをしてもらうためでした。それを見た弟子たちは咄嗟に叱りました。重要なやりとりを子どものために中断されたと思ったからです。その時、イエスはこう言われました。「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを邪魔してはいけません。天の御国はこのような者たちのものなのです。」(マタイ 19:14)

イエスはまず、「子どもたちを来させなさい」と肯定的に命じ、次に「わたしのところに来るのを邪魔してはいけません」と否定的に命じました。集まっていた大人に対して、子どもたちを「天の御国」に入る見本にするようにと言われたのです。

【2】 どこから来る安心か？

「ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。…カペナウム」(マタイ 11:21,23)

これらはイエスが宣教の拠点としたガリラヤの町々でした。したがって、そこに住む人々はイエスから十分にみことばを聞いていました。しかし悔い改めなかったのです。一方、ツロ、シドン、そしてソドム。これらは悪名高い町の代名詞でした。イエスはそれの方が、素直に悔い改めたであろうと嘆かれたのです。「あの人ほどは悪くない」と、人との比較から得られる安心感はイエスの前では無意味です。イエスは、みことばを聞いた者たちに、応答するかを問われたのです。

【3】 子どものように受け入れること

私たちは年齢を重ねるにつれ知識が増えていきます。過去の苦い思い出や恥をかいたことを通して、賢く立ち回ることを学びます。そして経験を重ねた大人は前もって作られた考えをもとに物事を解釈しようとします。一方小さな子どもはどうでしょうか。彼らは単純に物事を受け入れ、そして相手を信頼します。

イエスがエルサレム入城した時のことです。「ダビデの子にホサナ」(マタイ 21:15)という叫び声が宮の中に響きました。叫び声の主は子どもたちでした。祭司長たちや律法学者は子どもに腹を立てました。彼らは、イエスのことをよく調べ知っていました。彼らの目から見て何も分かっていない子ども達が「ダビデの子」と叫んでいる姿に、腹が立ったのでしょうか。イエスはそうした大人に言われました。「『幼子たち、乳飲みみ子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか。」(マタイ 21:16b)

実は、イエスが何者であるのかを知っていたのは、子どもたちだったのです。当時人々は、「天の御国」に入る資格は「知恵ある者、賢い者」と考えました。「天の御国」に入るためには律法を行なって義と認められるという努力が必要だと教えていました。それに対して、主イエスは「天の御国」は律法の行いによるものではなく、子どものように素直に受け入れる性格のものだと教えられました。「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。」(マタイ 11:28)

▷あなたも、子どものように素直に主イエスの招きを受け入れませんか？

